



T H E T I N Y L I F E

ち い さ な い の ち

m a s a k i

ちいさないのち

ちいさないのち

今日、すずめを拾ったんだ。すずめって凄いちいさな鳥でしょ、それよりもっと小さいの。つまりすずめのあかちゃん。

でもさ、小さいくせにピーピーピーうるさいの。きっと親を探しているんだろうな。あ、そうそう、決して捕まえたんじゃないんだよ。拾ったんだ。

僕は久し振りに家族で食品の買い出しに近所の駅ビルまで出かけてることにしたんだ。いつだって、ことの発端はかあさんなんだ。「あんた一緒にこない？今日は梅酒を作る用の梅を買ってくるからきっと一人じゃ持ちきれないのよ」

僕が久し振りに家に帰ってきたもんだから買い物に一緒に行きたがってしょうがないんだ。あの手この手で「一緒に行かないか」とけしかけてくるんだけど最後の手段が梅酒用の梅だったってわけ。そりゃ息子なんだから重い梅を何十個って持たすわけにはいかないよな。

まあ、そこまで言われて家でゴロゴロしてるのも気がひけてしまって居心地が悪いじゃない。だからしょうがなく一緒に行く事にしたんだ。そしたら出がけに彼女こう言うんだ。「おとうさんも一緒に連れ出すから」

なんだ、自分行かなくてもいいじゃない・・・。

二人で行ってくりゃいいじゃない。

まあここでダダをこねるのもオトナ気ないから一緒に行く事にしたんだ。かあさんの嬉しそうな顔ったらなかったね。

そんで家の裏の駐車場を横切って歩いてる途中に何やらピーピー足下から聞こえてくるんだよね。それがつまりこのすずめのこども。パタパタ小さな翼をはばたかせるんだけど全然飛べないのね。ほんと十センチ位だけジャンプできる程度。

まあ、正直このまま足早にその場を立ち去りたかったよね。だってそういうの見るの悲しいのさ。自然の掟だから僕らが手出しをする必要はないわけ。ほんとね。持ち帰っても死んでしまうのはなんとなく想像がつくから。それを見るのも辛いでしょ？

だってすずめだよ。

すずめって人に懐かないので有名なの。

知ってた？

でもなかなか愛嬌あって可愛いじゃない？そんなのが死ぬ姿なんて誰だって見たくない。

小さい頃に九州の田舎育ちだったとうさんはこういう生き物を育てたりするのが好きだったんだな。

とうさんは言うんだよ。

「たぶんあばれて巣から落ちたんだな。あと一週間もすれば飛べるようになったんだろう

けど・・・」

「元気がありすぎたのね」

「たぶん猫かカラスにやられるだろうな」

しばらくすずめの鳴き声のまねをして手なづけようとするものの、こういうことには手出し無用と知っているのか「さ、行こう」って言うんだな。

僕もどうせ面倒くさいことになるのがオチだからすっかりその場を立ち去るつもりだったんだ。でも足が動かない。

その時急に足が動かなくなってたんだ。まるで金縛りになったみたいにさ。

そんで目線もそのすずめから離れないんだ。たぶん少し長い時間見過ぎてしまったんだろうな。情みたいなものがこのちいさな生き物に湧いてしまったんだ。五秒くらいでその場を立ち去ればこんな金縛りになる必要もなかったのにさ。

「このカバンの口を大きくあけて上からかぶせちゃえば？」

突然かあさんがそんなことを言うんだよ。一番そんなことに関心のなさそうなかあさんがだよ。

そんでびっくりしたことに、その言葉を聞いた瞬間に僕の金縛りは解けたんだ。何かが鶴の一声で解禁したんだな。

僕はほぼ無心状態で手の平をすずめの背後からゆっくり忍ばせたんだ。そしたら簡単につかまえられちゃってさ。バタバタって勢いよく羽ばたいて遠くの方か車の下にでも行ってしまえばよかったのにさ。そうすれば「ああ、もうしょうがない」ってあきらめがついたじゃない。でもつかまえちゃったんだよ。

両手で包むように包み込んだらさっきまでピーピー言っていたのに急におとなしくなっちゃってさ、ほんとは抑え切れなくらいに暴れて手の平から飛び出してどっかに行っちゃえばよかったんだ。だってそれなら諦めもつくじゃない。「ああ、あいつは自分で逃げ出したんだからしょうがない」ってさ。

仕方ないから僕らはビル自体が黄色の派手な色のディスカウントショップに行って虫カゴを買ったんだ。そしてカゴにいれたらピーピーまたうるさく鳴き始めるんだよね。

だからそんなの持って駅ビル地下の食品街なんて行けないじゃない。だって食品衛生法とかうるさいご時勢に迷惑な話でしょ。

そんなわけで「俺、正面のスタバでコーヒーでも飲んで待ってるから」って言ってすずめと待つ事にしたんだ。

そしたらついてないんだな。財布を持ってきてなかったの。だからコーヒーも飲めずに待つ事になっちゃったってわけ。

三十分位待ったかなあ。

「ああ、いたいた。すずめの鳴き声で分かったよ」

なんて言いながらとうさんがやってきたんだ。待ってる間ちょっと恥ずかしかったよ。だってみんな視線をこっちに向けるでしょ。特に子供なんて「あ、なにあれ？すずめだ！」なんて言っ
てさ。結構嫌だったんだよね、そういうの。別に子供嫌いってわけじゃないんだけどさ。

まあいいんだ、いつの頃からかそういうのへっちゃら。

帰り道、昼飯に中華でも食べようかってことになって店をのぞいたらそこはバイキング形式のお店だったんだ。そんで貼紙に「ペットの持ち込みはご遠慮させていただいております」なんて書かれてるんだ。そりゃ、そうだよな、だってこのご時勢、そう、さっきも言ったけど、食品衛生法とかうるさいじゃない。

「これはペットじゃないから大丈夫だ」なんてとうさんは言うけど、そういう問題じゃないよね。分かる？この意味？

結局、このすずめのお陰で中華はおあずけになっちゃったんだけど、途中スーパーで寿司を買ったんでヨシとしないよね。

途中で僕は思ったんだよね。このすずめが死ぬの見たくないなってさ。でもひょっとしたら生き延びてまた自然に戻してやれるかもしれないとも思ったんだ。でもさ、プラスの期待が叶わなかった時、人は必要以上に傷ついてしまったりするんだ。期待ってしない方がいい。それは人に対しても。だから僕は必至になって思ったんだ。「たぶん死んじやうな」ってさ。

そしてさらにそれを口に出して言うてみたんだ。

「まあ、たぶん死んじやうだろうけどね」

「そうだな」

とうさんもそう言った。

そしてそう言ったことで僕は凄く気が楽になったんだ。なんだか不思議な感覚なんだけど、死んでしまうことに対する悲しみを最小限に抑えるための保険みたいなものだったんだ。こころの保険。

家に着いたらさ、早くビールを飲みたいくしょうがないとうさんは「よし、とりあえず食事しよう」って言うわけ。そこでかあさんは「おなか空かせたすずめより寿司が先なの？」なんて言うわけ。あんまり生き物に興味なかったイメージのかあさんだから僕はそこでまた少し驚いたよね。

そんなわけでとうさんは喉の乾きを我慢しながら、渋々すずめに餌を食べさせることにしたんだ。

「きな粉を水で融いてやってそれをあげるんだよ」なんて知ったようなことを言って水で融いたきな粉と水を交互にあげてやる。

最初は口を閉ざしていたすずめも段々と食べるようになってきた。

「よし、これで大丈夫かもしれないな」

すずめが食べこぼしをしながら嫌々食べる様子を、とうさんは真似しながら自分も口をパクパクさせて食べさせるんだけど、こんな時、僕に女の兄妹がいたら絶対嫌われるんだろうなと思ったよ。そういう「男のお茶目な姿」を女の子って凄い嫌うじゃない？特に親父のなんてさ。

寿司を食べた後も数時間おきにとうさんは餌を食べさせたんだ。すずめは糞もするようになった。僕は情が湧いてしまいそうなのでなるべく見ない様に触らないようにしたんだ。

暗い所に持っていくとすずめはあまり鳴かなくなった。鳥って暗い所ではおとなしくなる性質があるとかっていうよね。そのせいだったりするのかな。

しばらくその状態にしていたものの、すぐにその状態に慣れてしまったのか、またピーピーと

鳴きはじめてんだ。

「そんなに鳴くからお前は腹が減るんだよ」と、とうさんは話しかける。

でも日が暮れるといつの間にかすずめは鳴かなくなっていたんだ。ゴソゴソと音はするけれど。

「夜が来たからね。やっぱ鳥は暗くなるとおとなしくなる習性があるんだよ。明日の朝はまたピーピーうるさいぞ」と、とうさんは言い、「あら、それじゃご近所さんにご迷惑だわね」と、かあさんは笑った。

翌日目が覚めるとシトシトと雨が降っていた。

すずめは鳴いていなかった。

雨の止んだその日の夕方、僕は小さなスコップを片手に、「ちいさないのちの抜け殻」を土の中に埋めた。

あとがき

最後までお読みいただきましてどうもありがとうございました。

elcabooksでは紀行文を始めとした様々な「熱い」書籍の制作を行っております。常識化した日本の価値観に疑問を持ちながら日々「幸せの形」を模索しています。忙しさの中で見落としがちな日常や当たり前の生活の中に心を傾けるべき大切な何かがあるような気がしています。生活や旅や物事との触れ合いの中で引っ掛かった何かを表現出来ればいいなと思っています。そしてそれらは温かくもあり冷たいものでもあると思います。

ホームページでは文章を始めとして絵画等の表現活動を掲載しております。ご興味ございましたらお暇な時にでも遊びに来ていただけますと幸いです！

e l c a (elements of creative atmosphere) WEB SITE

<http://www.elcaworld.com>

ご意見や感想等ございましたらお気軽にご連絡ください。

email: elcamail★yahoo.co.jp (←★の部分を実際@に変えてご送付ください)

masaki (zonox)